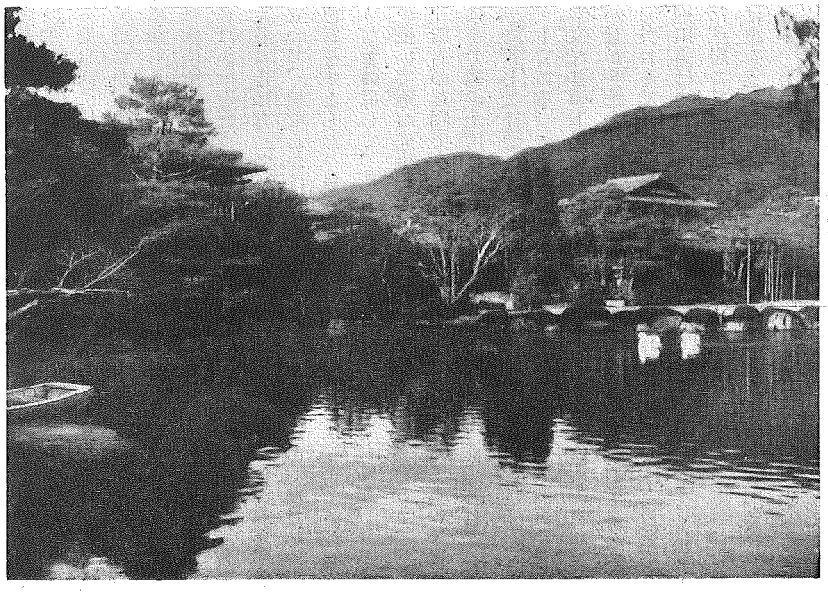
洛友會々報

京都市ヶ京区吉田
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

才八回洛友会総会の開かれる野村碧雲荘



本来の日本の庭園の特徴は天然勝景の地に庭園を作り、天然美と調和された庭園美を出す点にある。野村別荘の庭園は東山を望見する風光明眉の土地に位し、天然美を利用して作庭された日本の代表的な庭園である。

庭園面積五千坪、庭園内の建築は高尚優美な代表的日本建築で、庭園内にある石灯籠、手水鉢、庭石、庭木等すべて由緒ある歴史的な貴重品である。

六十周年記念会誌を読んで

明四二　滝口三雄
（米才五空軍府中基地施設部特殊顧問）

去る十一月、六十年記念の祝賀に当り何か思い出を書くようにといはれていたのだが、つい書きそびれて記念誌の配達をうけて、はっと思って残念がった次才である。この記念誌を読んで一層懐旧の情禁じ難く、遅蒔きながら私達の学生時代の先生先輩、同期生などの逸話などをものして、会報にでも載せて貰えれば望外の仕合せと思う。一向に取止めたことはなく唯だ思い出すまゝに書くわけである。

私は鹿児島の七高を出たものであるが、卒業の一年前、二名の同期生と共に、採鉱冶金に向うことを目的として、ハンマーを持参して金鉱の多い鹿児島県下を旅行したことがある。その節、山が野金山で計らずも新任の若い工学士が居るとのことでだしぬけに訪問することゝなった。その人は私共の先輩で、武藤盛勝さんであって、当時珍らしい一万ボルトの送電線を建設中で、意気軒昂たる時であった。当時吾々の口には仲々縁の遠いビールの御馳走にあづかり大いに吹かれて到頭私は電気に行くことに宗旨替えをして仕舞った。即ち武藤さんは私の生涯について忘れることの出来ない人になった訳である。所が京都に来て暫くして実験報告の見本を渡されて見た処、武藤さんのものであって、書体は勿論、その内容も全く立派に出来て居て、大学生になればこんなにえらいものかと感心した次才である。武藤さんはその後四五年経って仙台の高工の主任教授になられたが、学問許りでなく談論風発で酒豪でもあった。その後任として山が野金山には広島の鈴川貫一君が行かれて、私も卒業後山で同君を御訪ねして武藤さんのことを話したことがあった。

同期生には押田、坂牛、佐伯、花田などというテニス狂が居った。そのうち押田、坂牛、花田の三君は故人になって誠に残念である。日が暮れてもテニスコートに頑張って球の音だけで走り回ったこともあった。私と佐伯、坂牛の三人は田中村に下宿して居た。当時は田圃だあったが今はあの辺は大変立派な所になって当時の家など全然見当がつかない。吾々三人は食後何時もテニスの話許りで、対抗戦の技術を高声で大いに論じ合って居たが、或る時下宿の主人が羽織袴で這入って来て曰く「下宿は止めてもか様なことは申上げ兼ねるが、下には医科の人が試験勉強中で高声は邪魔になるそうだから控えて下さるまいか」とのことであった。羽織袴では誠に恐れ入ったが、当時大学生に対してはこのように敬意を払って呉れたものである。

佐伯君は朝寝坊の方で、八時からの吉川数授の電気化学は欠席勝であった。処が二年先輩の渡辺新十郎君（今の浅尾君）が吉川先生の試験が残って居って、受験後先生の所に行って結果を聞いて帰った話によると電気に佐伯というものが居るが、先生の試験には之が一番よく出来て居るとのことで、先生は当人の顔も知らなかったらうに、と当の佐伯君が苦笑したことであった。吉川先生の講義は独乙語入りでエレクトロードスパンヌングには閉口した。

同期には石川芳次郎君が居て、今でも高齢で活躍して居られることは嬉しいことである。同君は大方の諸君御承知の通り京都九条の発電所でマッキントッシ蒸気機関の油差しから運転等に働らいて、苦学した人で大学一年の時、地方の電気会社から月給七十円で所望された程のエンジン通であった。当時は大学を出ても七十円ならよい方であったから、君の腕前は大したものである。卒業後京都電灯で市内の蒸気動力をモーターに初替えた功績は実に大したものであるが、君がインヂケートルを用いてエンヂンの馬力を割出して、モーターの有利なるを需要家に納得せしめた腕前の致す所、遠く吾々の及ぶ所ではない。

先にも触れた花田猶興君は、後に神田の電機学校の理事となって今は故人であるが、三高出身の俊才であった。何かの拍子で難波先生の製図が遅れて、そのまゝでは制規に卒業

が覚来なくなったことがある。吾々同僚は大いに心配して皆んなで加勢したら期日内に片づくからといって勤めて見たが、生来生真面目の同君は已に後れる事を覚悟して吾々の申出を頑強に断って居た。それにしても残念だからというので、非常手段に訴えることになって、押田君が先頭に立って、線なんかはよい加減にして色彩を主とした一見奇麗に見えるようなものにして、私と押田君とが之を担いで難波先生の室に這入って、花田君の製図ですと差出したら先生はその棚の上に置いて呉れといって判を押して下さった。之で万事オーケーである。先生などのエライ人は学生などの下手な設計などには関心がなかったのであって、唯だ提出して呉れんでは困るのである。利口な押田君はこのことを百も承知で打った芝居であった。之を聞いた花田君は腹を立てたけれど最早や後の祭である。都合よく吾々と一緒に卒業することになったのは目出度いことである。

テニス仲間の今一人坂牛君は、卒業後松村繁太郎君の後釜として、青島の内外綿会社の工場に赴任して、数年後に故人になった真面目一方の惜しい人物であった。二年の時機械の松村先生の機構学の二度目の試験に私と共に試験場に居たのであるが私は幸に都合よく書けて早く室を出たが、その際チラと坂牛君の答案を見たら、二問目に真違いがあるのを見てとった。教室内では何うにもならないから、喫煙に出て来るのを待って居たら、同君間もなく出て来たので以上の話をして訂正を勧めた処何うしても承知しない。一年後れてもよいと云う。何うにも仕方がなかったが幸いに両名共パスしたからよかった。前の花田君といい、坂牛君といい、正しいことに対しては一身の利害を顧みぬ高潔なる精神には打たれるものがあった。私は之等の友人の態度によって、人間は正しいことには向けられるが、正しくないことには正当なる理由がつけられないから、向けられるものではないことを痛感して、両君には特に敬意を払った次第である。

青柳先生は、駄洒落の名人であった。或る会合の節先生が難波先生に対して「先生はお子さんの名前には困りませんね」「どうして」「ナンバーワン、ナンバーツウでよいではありませんか」と云はれたが、先生の洒落の中の秀逸だと思った。先生には塵芥焼却発電のことを教はったが、私は今でも先生の独乙語でこれをミウルフェルブレンヌングと覚えて居るが、学校を出て二十数年後先生を学士会宿舎にお訪ねして、何かの話の序でに、このミウルフェルブレンヌングの事を云い出したら、先生は吃驚されて、君はよくこの言葉を覚えて居たなと云はれたことがあった。先生は禁酒の上を越す排酒党であって、東京に来られる時などは排酒連盟と云う旗を押し樹てた学生群の歓迎を受けて居られたが、吾々年輩の者と会合などをされる時は、「君達は古いから、もうよいだろう」と云はれて酒を用いることを許されたものである。

難波先生に連れられて神戸の青合発電所に同期生と一緒に見学に行ったことがあった。当時神戸電灯には愛宕先輩が技師長をして居られたが水抵抗器見たいな相当大型の機械があって、先生に之は何ですと聞いて見たら、何処そこには之よりも数倍大きいものがあるといはれた丈けであったので、一同唖然としたものだった。先生の仏語は有名なものであったが、語学丈けは子供に譲れないと嘆じて居られた。

吾々は電気鉄道を塩屋さんに教はった。先生は青柳先生の先輩であって、京阪電車の創設者といってもよい人であった。大学に見えると青柳先生が自分で先生の事の世話などをして居られるのを見た。試験間際で辞されたので、野田清一郎さんが講師として試験をなさった。そこで例の受教簿に捺印されることになったが、先生は吾々の僅か二年の先輩であるので、吾々電気鉄道の科目の修了の印しとしては何うも物足らぬと云うことで、之を難波先生に訴えた処、それでは私の判も押して上げようということになって、今私共の保存して居る受教簿には二箇の印形が据はって居るのである。今となると野田さんに気の毒に耐えない。

吾々は、物理を三輪先生に教はった。先生は仏国のリサンセー大学に学ばれたそうだが、その先輩に土木の権威者で鉄道大臣にもなられた古市博士が居られて、同じく同大学に学ばれて居たそうで、試験の時同博士が問題を見て「ハハア、ベルヌイだな」と見徹うされて独り語をやったら仏国教官がそばに居て「君は答案を書かなくても宜しい」ということで大に面目を施したとの話を承った。この三輪先生の令嬢が九州大学機械科名誉教授小野鑑二先生の奥さんで、吾々は小野講師時代に製図と熱力学を教った。

機械と云へば松村鶴三先生を想い出す。トウやシグマでは大分悩まされたものであるが、或る時何かの事で電気の学生が聴講に出られぬことがあって、機械の学生に電気は出ん気だなと珍らしく洒落られたそうである。又前の物理教室では愛知助教授から力学の講義を受けた。後に東北大学の教授になられて最早や故人であるが、その御長男が今を時めく現岸内閣の法務大臣であり先の官房長官、大蔵大臣である。何となく懐しく且つ時代の変転を身近く感じる次第である。

吾々が卒業間近く彼の有名な前文相の菊地大麓先生が総長になられ、初めて合同講座として性教育を断行され、医科の藤波鑑教授から各種の性病などの講習を受けたのであるが恐らく学校として此の様な講座は之が初めてではなかったらうか。

機械科の朝永先生の講義は、当時東大の井の口先生の講義と共に、蒸気機関の名講義として有名であったが、滔々として二時間に亘り十八頁の分量には仲々骨が折れた。今でも想い出すのはボイラーの講義の終末に当り、先生は一段と声を高めて、「苟もエンジニアがボイラーに対しては、武士が戦場に出づる覚悟を必要とします」と述べ来りたる時、一隅にあって先生の講義の醍醐味に陶然たりし一学生、機械科の太田君は思はず口をついて「然らば鎧を着ずばなるまい」「イヤ仲々以て鎧処の騒ぎではありません」との応酬があり、一同暫くペンの運びを止めて、真面目臭った先生の顔を見める許りであった。先生の講義には時々名句が飛び出して来た。「このガバナーは鈍大なること大砲万右衛門（当時の横綱巨漢）の如し」とか「このガバナーは良いときは飛び上り過ぎて迂頂天になり、一つ悪くなると下り過ぎて悲観の極華厳の滝に飛び込む手合と同じく」など話題の豊富な先生の面影が躍如として居る。

その頃は先生方は勿論であるが、学生間にも八字髭を生やしたものが多かった。先生には才一に難波先生が立派なものを蓄えて居られた。青柳、本野両先生はカイゼル髭を生やして居られた。学生にも吾々の前後には国弘さんのは大学目薬と云はれた程の立派なものであった。又横山さんも立派で、同期生にも今は故人の市岡、小泉の両君の如きも実に堂々たるものであった。今から考えて見ても角帽に八字髭はよく似合って大学生としての尊厳を発揮して居るようにも思はれた。

関野弥三氏は八十余歳の高齢で健在されて居る由で祝福に耐えない。当時からガルバの神様で、能く測定

の指示を受けたり、吊糸を切っては渋い顔で修理して貰ったりして、随分御世話になったものである。然るに吾々の仲間で一年生の間は以上のようにお世話になるので、関野さん関野さんと引張り出したが、二三年生にでもなると、関野君と云う風なことになって、何うも相済まぬことであった。この人も立派な髭を蓄えて居られた。之等の髭も今思い出しては誠は懐しいものである。想い出は走馬灯のように際限がないが、此の辺でとめておきたい。

才八回　洛友会総会通知

一、日　時　四月二十六日（日）十一時より受付開始

二、総会及び懇親会場

京都市左京区南禅寺下河原町

野村別荘　電⑦四一二八

四条大宮又は京阪四条よりお越の方は市電百万遍行1に乗車東山二条にて下車、東え約五〇〇米、市電丸太町線にてお越の方は東天王町にて下車、南え二〇〇米、京都駅よりは市バス一乗寺向畑町行5に乗車、永観堂前下車直ぐ。

三、総　会　十二時三十分より

議　案

一、事務並に会計報告

二、昭和三十四年度予算審議

三、電気評論講読の件

四、その他

四、懇親会　午後一時より

模擬店及び抹茶席の設備あり、仁王庭園の美を賞しつつ談笑す

五、散　会　午後四時頃の予定

六、会　費

昭和二十年以前卒業の方　一、〇〇〇円

昭和二十一年以後卒業の方　七〇〇円

会費は別紙振替用紙にてお払込み下さい。

尚これを以て総会並に懇親会出席御通知に代えますから四月二十日までに到着するようにお送り下さい。

七、家族同伴歓迎

本会合には家族同伴を歓迎することになっております故、多数お申込み頂き度、この場合、同伴者の会費は御主人の会費（前項参照）と同額として前記振替用紙でお払込み下さい。

●関西支部総会並に新会員歓迎会

一、日　時　四月二十六日（日）十二時より

二、会　場　野村別荘

三、総会議案

一、事務並に会計報告

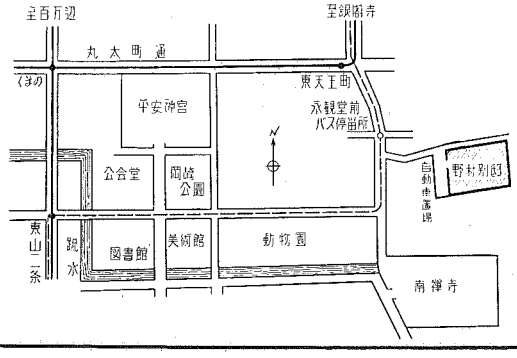
二、昭和三十四年度予算審議

三、役員選挙

四、その他

四、新会員歓迎の辞

尚当日は洛友会本部総会に先立って支部総会並に新会員歓迎会を開催する次才であります。



東京支部主催

才三回洛友会ゴルフ会

秋晴れに恵まれた十月三日、東京南郊の相模カントリークラブで、十三名同好の士を得て才三回ゴルフ会を開催しました。

この日の優勝者は、接戦の末別記のごとく同点のため年長順に日立製作所の橋本真吉氏、才二位は東京電力の西本憲三氏となり、才三位は新日本電気の土方鹿之助氏、才四位は三菱電機の松井登兵氏、才五位は両松本氏が同点にて年長順に松本久長氏となり賞品は才五位までしたので大変な違いとなりました。なおブービー賞は瀬川為三郎氏が獲得されました。

才一位から才三位までは規約によってハンデーを才一位二割、才二位一割五分、才三位一割更新しますので橋本氏が二二、西本氏が三一、土方氏が一七に夫々あがることになりました。

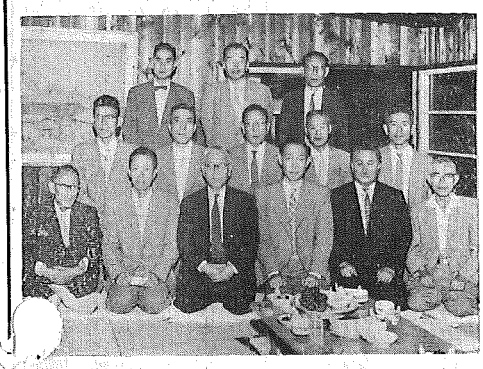
なお次回は二ケ月後の十二月三日川崎カントリークラブで行うことを約し散会致しました。（相木一男記）

卒年	氏名	Hdcp	Out	In	Out	Gr	Net	Ord.
2	吉長弘助	19	—	—	—	—	—	8
9	駒崎吉郎	12	46	46	44	136	118	5
12	久誉	20	48	50	50	148	118	6
12	宮之三	19	49	46	47	142	113.5	3
14	松本真芳	28	50	53	52	155	113	1
15	松本鹿憲	30	59	57	56	172	127	V.B.
15	土橋為登	19	—	—	—	—	—	11
15	方川一	18	—	—	—	—	—	7
15	本本三英	36	49	62	56	167	113	2
昭6	原芳雄	25	51	54	50	155	117.5	4
昭7	本憲雄	25	—	—	—	—	—	10
昭10	西本登	36	—	—	—	—	—	13
昭15	松井兵	32	—	—	—	—	—	9
昭17	塩沢弘							
	相木男							
	太田雄							

北海道支部便り

北海道支部では今夏北大工学部で開催された全国大学電気教官協議会に出席された加藤先生初め道外洛友会々員諸氏をお迎えして、八月二十一日小樽市張碓景勝園千秋閣で懇親会を開いた。小田部支部長の挨拶に続いで大谷先生から教室の近況をお伺いしてヂンギスカン料理に舌鼓を打ちながら会員諸兄の自己紹介や思い出話に一夕を楽しく過した。（三三・八・二一）

当日の出席者は光野重威（大六）、加藤信義（大七）、谷忠篤（大一四）、徳田精（講習所・大一四）、熊谷三郎（昭二）、山本茂（昭八）、大谷泰之（昭一三）、池上淳一（昭一八）、大塚徳雄（大六）、小田部毅（大七）、泉谷松太郎（大一二）、俣野麻太郎（大一四）、山上孝（大一四）、片山辰雄（大一五）



才一列左より光野，大谷，加藤，池上，熊谷，大塚の諸氏。才二別左より山上，俣野，泉谷，小田，山本の諸氏。才三別左より徳田，谷，片山の諸氏であります。

昭和十三年卒業生二十周年記念クラス会

昭和十三年卒業生クラス会は、二十周年を記念して、去る十一月二日午後四時より京都、東京の二会場に分れて盛大に開かれた。

京都会場（木屋町金茶寮）へは鳥養、岡本、阿部、松田、加藤、林重憲各先生方をお迎えし、会員十四名参集（東京より松尾、伊藤、九州より副島、北陸より藤宗、早東、地元京阪神より片岡、真弓、山本健、近藤、服部、小林、原、富永、大谷）一方東京会場（上萩荘）へは九名参会（熟田、福崎、村岡、西堀、平野彰、加藤、富岡、平野進、斎所）

京都会場

東京会場

まづ数ケ月以前より大谷幹事の手元で準備されていた、記念の家族写真アルバムと近況報告が一同に披露せられる。写真だけでは一向に名前の想い出せぬ人もあり、二十年の歳月の流れに感慨を新たにする。又集つた連中も写真よりは確かに実物に近く話をしている中に益々実物らしくなると一同大笑い。

やがて京都会場へは鳥養先生はじめ五名誉教授と林先生をお迎えして益々お元気な姿に接し、御高話を拝聴する。宴酣となる頃、東西会場を電話にて連絡しその雰囲気とメッセージの交換をはじめる。一寸明瞭度を欠いたが、それでも約一時間次々と相手を呼出し懐しみつつ話をする。全く一堂に会した感じだ。

そして両会場とも午後十一時頃一応閉宴、京都会場の方はそれから二次会に行くものや、一人者懐しき店をコッソリ探訪するものもあり、一同深夜帰宿後又歓談数刻、翌日は朝の鴨川の床の気分を味って名残を惜しみて正午頃解散した。

（幹事　京都会場、富永、大谷、東京会場、平野進、平野彰、斎所）

訃音

小山熊次郎君（大4）一月二十九日
吉田二郎君（明37）二月二日御逝去なさいました。
謹みて哀悼の意を表します。

お願い

年度末になりましたから、洛友会費未納の方はお忘れなく別葉振替用紙にてお払い込み下さい。

イリノイ大学気体電子工学研究室より

昭一六　武田進

（横浜国立大学工学部助教授）

一昨年秋よりここで放電プラズマの基礎研究に従事してゐます。電気工学の中でも地味な学問であった放電現象も注目を浴びてゐる核融合反応に必要な高温プラズマの基礎として重要な分野になりつつある様です。日本の様に研究資料の調達に力を費すことがなく研究スピードの早いのがこの国の利点でせう。